

イギリス湖水地方を歩く

10 期 吉野和彦

2008 年 5 月末から妻と英国旅行をするなかで、湖水地方に 3 泊し、フットパスなどを歩いたことの道中記です。

6 月 2 日 エディンバラから南のカーライルに列車で行った。車窓には荒野、牛や羊の牧草地、ゴルフ場などスコットランドの風景が広がる。

カーライルはローマ皇帝ハドリアヌスが築いたブリテン島を横断する長城の西端の城塞の町。街歩き後、湖水地方のバスのフリーパスを購入し、バスで湖水地方北部のケズウィックに向った。町の近くにダーウエント湖がある。湖畔の遊歩道を歩く。対岸はなだらかな草地の広がる山々、湖には木の茂った小さな島々、水鳥も多くいる。それらを眺めながら森や多種の羊が草を食む牧場の中も歩く。この時、牧場境界の柵の越え方を知った。町に戻りウインダミアに向った。二階建てバスの最前列に座った。バスは丘陵地帯の狭い道をかなりの速度で走った。制限速度表示 40、たぶん単位はマイルであろう。前方に枝を見ると思わず頭を下げ、丘の上り下りではジェットコースター乗車の感覚であった。しかしゆったりと広がり変化に富む景色は楽しめた。

湖水地方の中心ウインダミアで予約した B & B (民宿) に入った。一段落後、裏山のオレストヘッドに登る。頂上から夕暮れのウインダミア湖が一望できる。穏やかな静けさに包まれている。下りの森の中は薄暗かったが木々の狭間から透ける仄かに明るい街が目標となって迷わなかった。オーナー推薦のレストランで食事をした。

6 月 3 日 朝、食堂で隣のテーブルの恰幅の良い年配の男性から話しかけられた。(彼はここに一週間滞在しマス釣りを楽しむ。この後毎朝の彼との会話は楽しかった。)

バスでボーネスに向かった。車窓から物置小屋の横に再利用のためか屋根葺き石板が整理して積み上げられてあるのが見え

た。日本では「♪ 薨の波と雲の波・・・」は絶滅危惧歌詞であるが、西洋では千年以上続く石の文化が生活に染込んでいることが理解できる。

三日月形のウインダミア湖の中央部を連絡するフェリーで対岸に渡る。距離 500m、車両 10 台は乗るフェリーの推進方法に感心した。それは両岸から緩く張られて水中に没しているワイヤーを、船の専用車輪で手繰り寄せて移動するものである。スクリュウ推進法に比べてエネルギー効率が良いのでエンジンは小型で騒音が小さい。不要な水中流を起こさないで水底の状態を乱さないなど環境保護が徹底されている。

対岸に渡って、ニアソーリ村を目指しフットパスを登る。森や牧場や田舎道など次々に代わる道を歩く。村のヒルトップにあるベアトリックス・ポターの家まで誰にも会わなかったが、そこは観光客で賑わっていた。その広くはない庭にはいろいろの花が咲き、周囲に溶け込む石造りの家屋との調和はポターの世界そのものである。

ホークスヘッド村に向かった。エスウェイト湖西岸の車 1 台なら通れる田舎道を歩く。道を外れ湖畔で休憩をした。静かで穏やかな湖である。湖を過ぎると緩やかな山の裾と広い草原の間を歩く。約 3km の行程、人も車も見なかった。

ホークスヘッドで食事後、ネットで入手した地図を見ながら村を周回するフットパスに移る。幾つかの牧場を通り抜け集落に入る。地図のルートは家並で右折し小道に入ることになっている。しかし見つけられない。付近を注意深く探したがだめだった。地元の人に教えてもらおうとしたが人の気配がない。困惑していると中年女性二人連れのハイカーがやってきた。彼女らに事情を話すと、近くの屋敷の閉じた門の前に行き脇扉を開けた。屋敷の庭を通り抜けるのがルートである。(後で知ったが湖水地方には個人の敷地に誰でも通れる個所もある)

森や牧草地を抜け高台に登る。ラターバローである。ウインダミア湖や周囲の山々も見える。天気が良く爽快であった。しばらく休憩し眺望を楽しんだ。ルートを進めた森の中で、先ほどの彼女らに出会った。私たちと逆回りであった。お礼を述べ少し話をした。

つぎに村の家並みが見渡せる場所になる。初めて見る風景だが昔懐かしい田舎の風情を感じさせるものだった。村に戻り、ワーズワースが通った学校や教会を見て回った。

道に迷ったことや人と出会うことが少ないことから、明日予定の山岳地帯のルートにネット入手地図では不安を感じ、書店で等高線図を買うことにした。1/25000 の地図があった。標高はメートル表示、距離はkmとmile の尺が記載されてある。

村からバス、アンブルサイドで乗り換えウインダミアに帰り、パブでビールと夕食を取った。

6月4日 バス時刻の関係で朝食を15分早めてもらい、アンブルサイドに向った。バスの乗り換えに時間があり、近くに独特の形の尖塔が見えるので教会に行った。尖塔はノルウェー風のゴシック(バイキングの影響か?)である。バスでニューダンジョンギルに行った。9:30 標高 90mから登山を始める。小川に沿って進む。小さな谷に入る。勾配が付きだし沢となりさらに急登になる。周囲の木々は背丈を徐々に低くし、そして樹木はなくなり草のみになる。登りきるとスティックル・ターン(氷食でできた小湖)標高 500m。岩峰が池の向こうに壁のように覆いかぶさり岩石と緑の絨毯が広がっている。ここから上は北アルプスの雲の平や黒部五郎岳カールの様相を示す(但し樹木のない)。

休憩後、池を過ぎ岩壁の端の急な岩山を150m登る。高度を上げると視界は広がり、山々や点在する小湖や草地に羊の群れも見られる。岩のある草原に出る。ガスがでて視界が悪くなったが、草原の道は細くても整備されており歩きやすい。

突然先方に道を塞ぐ白い岩のような物が見えた。何故邪魔なものを除かないのか訝しげに思いながら進んだ。目前になり物体が明瞭になった。羊の死体であった。羊の死体はこの後も見た。この広い山塊域では羊を春に放し秋に収容する間の出産や死亡は自然任せなのか?と思った。

暫くしガスが消え、ルートを進めてこの山塊の最高点ハリソンスティックル標高 736mに向かう。斜面は草地から徐々にガレ場となる。頂上で休憩し360度の眺めを楽しむ。眼

下にスティックル・ターン、遠くにウインダミア湖、山々は荒涼と広がっているが、山裾から谷間に広がる緑には暖かい豊かさが感じられた。



(写真上：ウインダミア湖遠望)

(写真下：スティックル・ターンと山々)

別ルートに登山者が3人いた。谷を挟んでもう一つの峰にも上り休憩。そして登りとは別の急な道を一気に下りダンジョンギルに戻った13:30。下山後、ウォーカーズバーの爽やかなテラスでビール。一汗かいた後なので言うことなし。サンドイッチの昼食。

バスでアンブルサイドに戻った。グラスミア行きバス時刻板を確認中、妻に言わせればハリソン・フォード似の男性がアンブルサイド行きのバス番号を教えてくれた。彼も夫婦で旅行中とのこと。同じバスに乗りワーズワースの住んだダブカテッジで同じく降りた。

博物館となっている彼の住居を見学した。途中から日本にも旅行したことがあるオーストラリア人の母娘も加わり会話が弾んだ。私たちは博物館を出た後、グラスミアに向けて一般道を歩き、町の手前でライダル湖西岸のフットパスに入りアンブルサイドに向かった。日も傾きかけた静寂の中で、ライダル湖の幾つかの緑の島影が印象的であった。湖が川となり歩みを進めると、いつの間にか人

家の敷地に入り込んでいることに気付いた。川の方を見ると飛び石伝いに対岸に渡れそうで、一般道にも出られる。時間も迫っているのでルートの詮索をやめ、一般道に出た。少し歩くとライダルマウントのバス停があり、そこにあのハリソン似の人がバスを待っていた。こちらの予定を話すと、彼はここでバスに乗らず道路の少し先で右折し田舎道を行けばアンプルサイドに行ける。その道は lovely walk であると話した。助言を実行した。山の端に日は沈んでいるがまだ明るかった。近くを流れる川の向こうに草地が広がり、その先的一端からは遠くのアンプルサイドの街並み見える並木の田舎道はまさに lovely の表現通りである。歩いているとこの田舎道は町はずれに向かっているようだ。その場合、街中でのバス停探しが必要だ。町全体を注意してみると、朝立ち寄った教会の独特の尖塔が分かった。橋のある場所で川を渡り、草地を突っ切ったり、野道を歩いたりしてその教会に向かった。バスでウインダミアに着いたのは 20 時前であった。湯上りにくつろいで飲食したくなり、スーパーマーケットでワインとパンと総菜を買い、宿に帰った。

余記

6 月 5 日 ロンドンへの帰途、ハワースのブロンテ姉妹の住居(博物館)に寄るため、ウインダミアから列車でランカスターに向かった。この列車乗り継ぎに時間があるので駅周辺の街歩きをした。大きな城壁が見えた。これは幸運だ。なぜならヨークの街歩きでローマ帝国時に造られた市街地を囲む城壁を歩いていると、バラ戦争の資料が展示されていた。それなら対戦相手のランカスター家の資料も見たいと思っていたからである。閉じた城門に近づき、入場手段がないかを探した。城壁に小さな銘板が嵌め込まれてある「所有者は英王室、借用者の用途は刑務所」。ランカスター城の使われ方とエディンバラの王立植物園が無料であったことを考えると、英王室のしたたかさを再認識した。

列車でキースリーに行き、バスでハワースに。ブロンテ姉妹の住居には多くの観光客が訪れていた。内部を見学後、建物の横を抜けて「嵐が丘」の舞台となったペニントンヒ

ルに登る。ここには誰もいなかった。曇り空で風が吹き、丘は地を這うようにヒースで一面に覆われている。寂寥感を覚えた。

